金毘羅灯籠

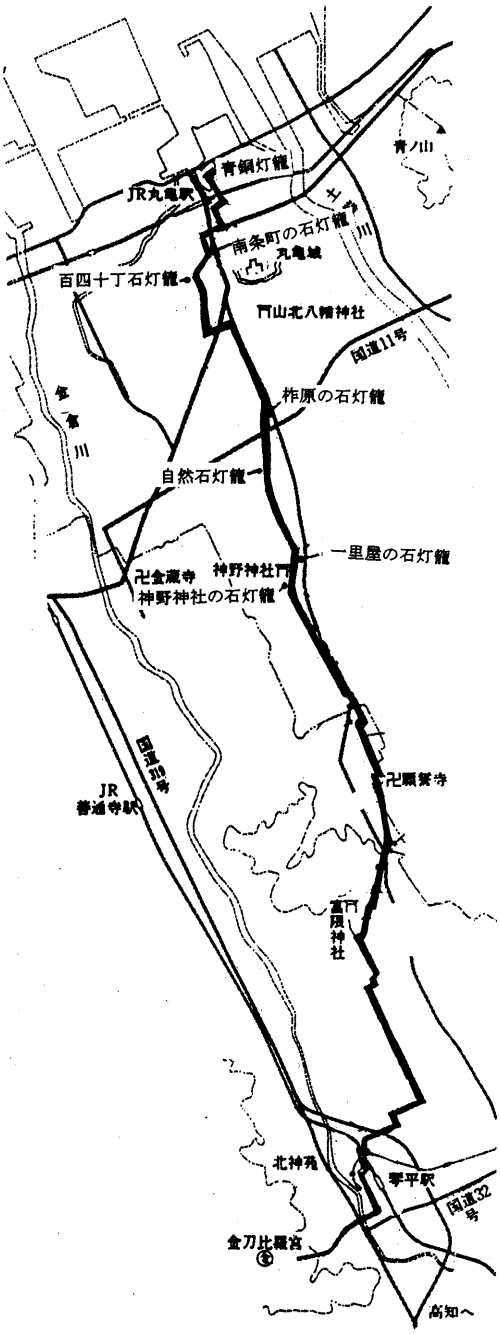
堀家守彦

「金毘羅船々追手に帆かけてシュラシュシュシュ廻ればお国は讃州那珂の郡象頭山金毘羅大権現」の歌に出てくる金毘羅船は、延享元年（一七四四）諫岐出身で、大坂の船宿経営者多田屋新右衛門が、金毘羅参詣客を大坂から丸亀まで送るために運航したのが最初と言われる。この金毘羅船は特別な規格や形による船の種類ではなく、ただ、「金毘羅参詣の客を乗せる船」というだけでの呼称のようである。これと同様に金毘羅灯籠も「金毘羅さんに献じられた灯籠」という意味と勝手に解釈して話を進める。

金毘羅灯籠は建立場所が金毘羅さんの境内であった乃、参詣の街道の道端であったり、村の鏡守や象頭山の造拝所であったりする。これらの灯籠の中で丸亀関係のものを先ず金毘羅さんの境内で探してみることにする。金刀比羅宮の境内には、国の有形民俗文化財に指定されている数多くの灯籠があるので見つけるの、は難しいが、大門を入って直ぐの広場で五人百姓が傘を開いて飴を売っている後側に「京極高矩」（丸亀四代藩主）が寄進した六角の石灯籠一対がある。これは灯籠の傘に京極家の平四ツ目の紋がついているので見つけ易い。さらに、賢木門の内側に「丸亀万人簾中」と印された四角形石灯籠一対があり、なお進むと、本殿に近い閣峠と四段坂に「丸亀灯明溝」の六角形の青銅灯籠一対が離れ離れになって建てられている。

つぎに、市域で丸亀からの金毘羅参詣道に残っている灯籠を見てみよう。金毘羅船が丸亀に近づくにつれ次第に雄姿を顕かにして、人々の日を楽しませてくれたのは亀山の上の蓬莱城であり、次に新堀湊に入る直前で人々が見たのは、青銅の大きな灯籠であった。そして丸亀の土を踏んだ旅人は改めて青銅製灯籠の「江戸溝中」「一金八拾両」等の字を確かめて、金毘羅へ向かったであろう。金毘羅参詣客が上陸して最初に見た金毘羅灯籠（後に太助灯籠と呼ばれる）が街道で唯一の青銅製灯籠であった。若しこの旅人が、福島で上陸していたら何基かの石灯籠に出会った筈である。現在福島町の道端には石灯籠は無いが、福島から移転したことを明記されている灯籠もあり、最近福島町から移転した灯籠も幾つか知られているから。

街道で旅人の案内の役目を終えた灯籠は、石の置物として装飾用に転用されたり、中には邪魔物として除かれ場違いの所に置かれているのもある。それでもなお丸亀市内の数箇所で金毘羅灯籠は保存されている。その一つは南条町の中程に、これだけは建てられた時の位置が確保されていると思われる貴重な石灯籠がある。それには明和元年（一七六四）農人町と南条町の人々によって建てられたと彫られている。此処から南に上ると、中府口と呼ばれた旧番所跡の側に、竿に育四十丁と刻まれた石灯籠がある。この灯籠は刻字により文化五年に下絵国（千葉県）の簾中によって建てられたことがわかる。街道で次に見られる灯籠は林原の新旧道の分サれ又に立つ文久三年二八六三）の石灯籠で、丸亀商人によって建てられたものである。さらに南に進むと正面寺地区に地元の人達によって自然石を利用して造られた石灯籠がある。さらに南進して郡家町に入ると一里屋の交差点と神野神社正八幡宮の社頭に石灯籠がある。一里屋のは明治七年の建立で中台に十二支で方角を示し、竿には東西南北四面全てに行き先が善かれている。また、灯籠の形もこの街道の多くの灯籠とは異なっている。神野神社の前のも道標を兼ねており建立は文政十三年（一人三〇）とあり、これも地元の人と丸亀の商人の寄進になっている。

金毘羅街道に面していない場所でも金毘羅大権現や㊨と刻まれた灯籠がある。地元の人が金毘羅さんに「お光」をあげた時の灯籠である。これらの灯籠も街道の灯籠と共に、文化財として保存しなければならない。

（丸亀市文化財保護審議会委員）